

北朝鮮による対日有害活動

1 北朝鮮による日本人拉致容疑事案

一 概要

平成一四年九月に行われた日朝首脳会談で、金正日国防委員長が日本人拉致問題について、「特殊機関の一部の盲動主義者らが、英雄主義に走つてかかる行為を行つてきたと考えている」との認識を示して謝罪し、同年一〇月には北朝鮮から五人の拉致被害者が帰国しました。その後、一六年五月及び同年七月には、これらの拉致被害者の家族の帰国・来日が実現しました。

警察は、現時点では、北朝鮮による日本人拉致容疑事案は一二件発生し、一六人が拉致されたと判断しています。

二 拉致の目的

北朝鮮による日本人拉致容疑事案については、その目的は必ずしも明らかではありませんが、諸情報を総合すると、北朝鮮工作員が日本人のように振る舞えるようにするための

三 拉致容疑事案の捜査状況

警察は、原敷尾さん拉致の実行犯である北朝鮮工作員・辛光洙・有本恵子さん拉致の実行犯である「よど号」犯人・魚本（旧姓・

教育を行わせることや、北朝鮮工作員が日本に潜入して、拉致した者になりすまして活動できるようにすることなどが、その主要な目的とみられています。なお、金正日国防委員長は、日朝首脳会談の席上、日本人拉致の目的について、「一つ目は特殊機関で日本語の学習ができるようにするため、二つ目は他人の身分を利用して南（韓国）に入るためである」と説明しました。

また、「よど号」犯人の元妻は、金日成主席から「革命のためには、日本で指導的な役割を果たす党を創建せよ。党の創建には、革命の中核となる日本人を発掘、獲得、育成しなければならない」との教示を受けた田宮高磨から日本人獲得を指示された旨証言しており、日本人拉致の背景には、金日成主義に基づく日本革命を行うための人材獲得という目的もあつたものとみられています。

安部）公博、宇出津事件の主犯格である北朝鮮工作員・金世鎬について、逮捕状の発付を得て、国際手配を行うとともに、外務省を通じて、北朝鮮に対し、身柄の引渡しを要求しています。

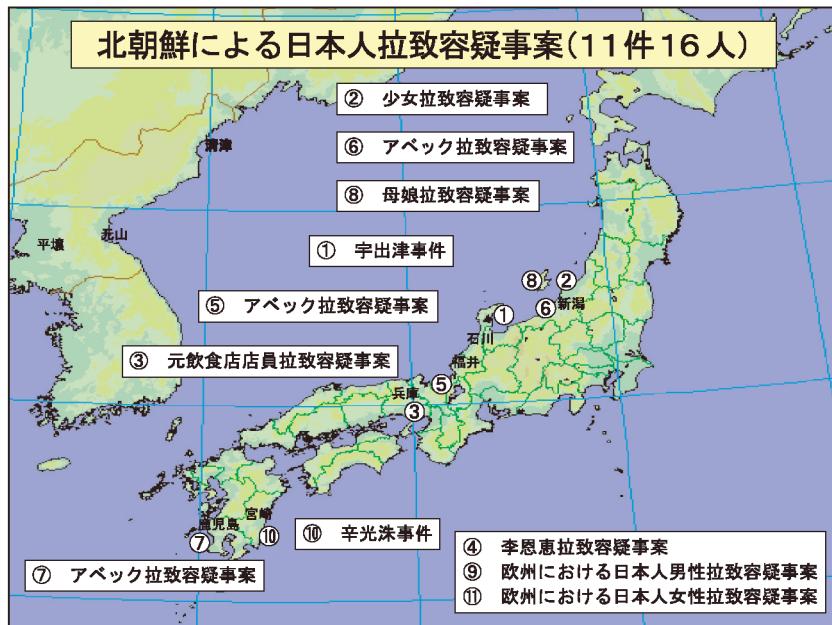
また、既に日本人拉致容疑事案と判断したもの以外にも拉致の可能性を排除できません。警察では所要の捜査や調査を進めています。

ことから、

四月には、昭和五三年六月に兵庫県で男性が失踪した事案を新たに拉致容疑事案と判断し、その旨を公表しました。

事件(事案)名	辛光洙事件	欧州における日本人女性拉致容疑事案	宇出津事件
被 疑 者	辛 光 洙	魚本(旧姓・安部)公博	金 世 鎬

日本人拉致容疑事案関係の国際手配被疑者



発生時期・場所		事案(事件)名	事案の概要
①	昭和52年9月 石川県鳳至郡 (現鳳珠郡)	宇出津事件	北朝鮮工作員に取り込まれた在日朝鮮人が、在日米軍に関する情報収集や对韓国工作に従事していたところ、「45歳から50歳位の日本人独身男性を北朝鮮に送り込め」との指示を受け、かねてから知人であった東京在住の日本人男性を海岸に連れ出し、工作船で迎えに来た別の北朝鮮工作員に同人を引き渡したもの(主犯格の北朝鮮工作員・金世鎬の逮捕状を得て、国際手配。)。
②	昭和52年11月 新潟県新潟市	少女拉致容疑事案	当時13歳の横田めぐみさんが、部活動を終えて中学校から帰宅する途中、海岸から数百メートル離れた地点で友人と別れた後消息を絶ち、行方不明となったもの。
③	昭和53年6月頃 兵庫県神戸市	元飲食店店員拉致容疑事案	神戸市内の飲食店に入りしていた田中実さんが、北朝鮮からの指示を受けた同店の店主である在日朝鮮人の甘言により、海外に連れ出された後、北朝鮮に送り込まれたもの。
④	昭和53年6月頃 不 明	李恩恵拉致容疑事案	昭和62年11月に発生した「大韓航空機爆破事件」の実行犯である金賢姫が、「北朝鮮において、53年から54年ころに日本から拉致されてきた「李恩恵」と称する日本人女性から、日本人になりすますための教育を受けた」、「李恩恵は「日本から船で引っ張られてきた」と言っていた」と供述したことなどから明らかとなつたもの。
⑤	昭和53年7月 福井県小浜市	アベック拉致容疑事案 (福井) (注1)	地村保志さん、濱本富貴恵さんが、デートに行くと言って自動車で外出したまま帰宅せず、自動車だけが海岸付近の展望台で鍵を付けたままの状態で発見されたもの。
⑥	昭和53年7月 新潟県柏崎市	アベック拉致容疑事案 (新潟) (注2)	蓮池薰さんが家族に自転車を借り、「ちょっと出かけてくる。すぐ帰る」と言って自宅から出かけたまま消息を絶ち、奥土祐木子さんも、同僚に「仕事が終わってからデートする」と言って勤務終了後勤務先を出たまま消息を絶つたもの。蓮池さんの乗っていた自転車は、海岸から数百メートル離れた図書館の前で発見された。
⑦	昭和53年8月 鹿児島県日置郡 (現日置市)	アベック拉致容疑事案 (鹿児島)	市川修一さんが、増元み子さんを誘って浜に夕日を見に行くと言つて外出したまま帰宅せず、市川さんの乗っていた自動車は、同浜のキャンプ場付近で、扉の施錠がされた状態で発見されたもの。増元さんも、市川さんと浜に夕日を見に行くと言つて外出したまま帰宅しなかった。
⑧	昭和53年8月 新潟県佐渡郡 (現佐渡市)	母娘拉致容疑事案(注3)	新潟県真野町において、曾我ひとみさん、曾我ミヨシさん母娘が、買物に行くと言って自宅から出かけたまま消息を絶つたもの。
⑨	昭和55年5月頃 欧 州	欧州における日本人男性拉致容疑事案	欧州滞在中の石岡亨さん、松木薰さんが、それぞれ消息を絶ち、その後、石岡さんから家族あてに届いた昭和63年8月にポーランドで投かんされた手紙の中に、石岡さん、松木さん、有本恵子さんの3人が北朝鮮に滞在している旨が記載されていたもの。
⑩	昭和55年6月 宮崎県宮崎市	辛光洙事件	昭和60年6月に韓国当局の発表により発覚した事件で、北朝鮮工作員である辛光洙らが、55年6月、大阪府在住の原敷晁さんを宮崎県の青島海岸に連れ出し、工作船で北朝鮮に拉致したもの(辛光洙の逮捕状を得て、国際手配。)。
⑪	昭和58年7月頃 欧 州	欧州における日本人女性拉致容疑事案	英国留学中の有本恵子さんが、昭和58年10月ころに両親あてに配達されたコベンハーゲンからの手紙を最後に消息を絶つたもの。その後、同じく欧州から失踪した石岡亨さんから家族あてに届いた63年8月にポーランドで投かんされた手紙の中に、有本さんら3人が北朝鮮に滞在している旨が記載されていた(よど号犯人魚本(旧姓・安部)公博の逮捕状を得て、国際手配。)。

注1~3: このうち、地村保志さん、濱本(現・地村)富貴恵さん、蓮池薰さん、奥土(現・蓮池)祐木子さん、曾我ひとみさんの5人が、平成14年10月、24年ぶりに帰国した。

四 第三回日朝実務者協議後の日朝の動向

平成一六年一一月九日から一四日にかけて、平壌で第三回日朝実務者協議が開催され、この日本政府代表団に警察庁の職員が新たに参加しました。北朝鮮は、従前と同様、当時拉致被害者と認定していた一五人から帰国済みの五人を除いた一〇人のうち、八人は死亡し、二人は入境の確認が取れないと説明しました。しかし、北朝鮮が説明する「死亡」に至るまでの経緯が不自然で、事実であるか疑わしい点や事実が不明である点が多くありました。

この協議の際、北朝鮮は、拉致被害者の横田めぐみさんの「遺骨」と称するものを日本政府代表団に提出しました。これについて、関係警察は、専門家により慎重に選定されたDNAを検出できる可能性のある骨片一〇片について、DNA鑑定の分野では国内最高水準の研究機関である帝京大学と警察庁科学警察研究所に鑑定を嘱託しました。その結果、帝京大学に鑑定を嘱託した骨片五個のうち四個から同一のDNAが、他の一個から別のDNAが検出されました。が、いずれも横田めぐみさんのDNAとは異なっていました。

政府は、同年一二月二五日、提示された情報及び物証を精査した結果を北朝鮮に伝えました。これに対し、北朝鮮は、同月三〇日、横田めぐみさんと北朝鮮側が六者会合に早期かつ無条件に復帰し、問題解決のために前向きな対応をとることを強く求めるなどとする外務報道官談話を発表しました。その後、一一月三日、四日の二日、北京で、約一年ぶりに再開された日朝

「受け入れることも、認めることもできないし、それを断固排撃する」などと主張し、「朝日政府接触にこれ以上意義を付与する必要がなくなった」と述べました。また、翌一七年一月二六日、我が国に「備忘録」と題する文書を提出し、横田めぐみさんの遺骨と称するものに関する鑑定結果はねつ造であると改めて主張するとともに、その返還を求めました。

これに対し、我が国は、二月一〇日、北朝鮮に「北朝鮮側「備忘録」について」と題する文書を伝達し、我が国の見解は、「厳格な手続きに従い、日本で最も権威ある機関の一つが実施した客観的かつ科学的な鑑定に基づくものである」などと反論するとともに、拉致被害者の即時帰国と真相究明を求めました。

しかし、北朝鮮は、同月二十四日、我が国に對し、「この問題について日本政府と議論する考え方はない」などとした上で、責任ある者の処罰と遺骨の早期返還を要求しました。これに対し、我が国は、同日、「生存する拉致被害者の即時帰国と真相究明を改めて強く求め」、「北朝鮮側が六者会合に早期かつ無条件に復帰し、問題解決のために前向きな対応をとることを強く求める」などとする外務報道官談話を発表しました。その後、一一月三日、四日の二日、北京で、約一年ぶりに再開された日朝

政府間協議では、日本側から「拉致問題等の懸案事項に関する協議」、「核問題、ミサイル問題等の安全保障に関する協議」及び「国交正常化交渉」の三つの協議を並行して行う案を提示しました。北朝鮮側は、一二月二四日、二五日に開催された協議においてこの提案を受け入れました。これらの場において、日本側より、生存する拉致被害者の早期帰国、真相究明、容疑者の引渡しを改めて強く求めましたが、北朝鮮側から、拉致被害者に関する新たな情報の提供はなく、拉致問題について具体的な進展はありませんでした。

2 様々な形態で展開される北朝鮮の対日有害活動

一 北朝鮮の対日諸工作

北朝鮮は、一七年中も、「拉致は解決済み」、「日本は過去の清算をすべき」との従来の主張を繰り返しました。また、我が国において経済制裁の実施を求める声が出ていることに對しては、朝鮮労働党機関紙「労働新聞」等を通じ、「朝日の敵対関係は度を越して限界点に至り、交戦直前の危険千万な事態へと肉薄している」、「我が軍隊と人民は、日本の反共和国制裁発動に自衛的報復措置をもつて

強硬に対応するであろう」との論評を掲載するなどして、こうした動きを強くけん制、警告しました。

また、北朝鮮は、一七年が第二次日韓協約締結から一〇〇年に当たることをとらえ、韓国を含む在外の同族社会に対して民族の団結を強調しつつ、「日本は、昔も今も我が民族の不眞戴天の敵である」、「全朝鮮民族は、日帝による強盗さらがらの『乙巳五条約』ね



朝鮮総聯が開催した「総聯結成50周年記念中央大会」(5月、東京)(共同)

つ造一〇〇周年に当たる今年、日本の百年の罪悪を総決算し、我が人民の深い恨みを何としても晴らすという強い意志により、日本の朝鮮再侵略野望を粉碎すべきである」等の呼び掛けも行いました。

こうした非難、恫喝、けん制等は、我が国の歴史認識や国連安全保障理事会常任理事国入りを目指す動き等、様々な事象をとらえて行われました。

二 朝鮮総聯を介した対日諸工作

北朝鮮は、朝鮮総聯を介した間接的な諸工作を展開しており、日本国内における北朝鮮に有利な世論の醸成、北朝鮮の主張に同調する日本人の結集（組織化）等を図っています。

一四年九月の日朝首脳会談において日本人拉致問題等が取り上げられて以降、北朝鮮及び朝鮮総聯に対する我が国の国民世論は厳しいものとなっています。その結果、朝鮮総聯関係者の間にも動搖が広がっており、組織離れ等による弱体化が進む中、朝鮮総聯は、我が国の各層人士・団体等に対する諸工作を活発に展開することで、盛り返しを図っています。

とりわけ一七年は、朝鮮総聯が、昭和三〇年五月二十五日の結成から五〇周年を迎えたことから、中央本部のほか、全国各地の地方本部等

においても、大掛かりな記念行事を開催し、国會議員を始めとする各級議会議員や地方自治体関係者等を数多く招待して、北朝鮮及び朝鮮総聯の日頃の活動に理解を求めました。

また、北朝鮮は、「拉致は解決済み」とし、日朝国交正常化は「過去の清算」を前提とするとしていますが、朝鮮総聯においても、積極的に「過去の清算」問題を取り上げ、第二次世界大戦までに我が国の企業に徴用・雇用された朝鮮半島出身者の遺骨調査のため、日本人関係団体と連携して、地方自治体に積極的に働き掛けを行うなどしています。



警視庁による薬事法違反事件に伴う捜査に対して抗議する在日本朝鮮人科学技術協会の関係者(10月、東京)(時事)

なお、一〇月には、警視庁が、薬局開設及び薬品販売業の許可を受けずに医薬品を販売したなどとする薬事法違反事件で朝鮮総聯傘下団体である在日本朝鮮人科学技術協会の幹部二人を逮捕するとともに、同協会等関係先を捜索しました。

三 万景峰九二号の入港をめぐる動向等

北朝鮮と日本を結ぶ北朝鮮船籍の貨客船万景峰九二号は、在日朝鮮人が訪朝する際の足として利用される一方で、これまでに、不正送金や不正輸出、工作員の送り込み等、在日朝鮮人社会と北朝鮮を結ぶ裏の役割も担っているのではないかとの指摘がなされており、実際に、同船をめぐっては、過去幾つかの事件が発表されています。

警察は、従来から、万景峰九二号の動向について、重大な関心を有してきたところであり、同船の入港の際には、関係各機関と緊密に連携しながら、必要な警備諸対策を講じるとともに、違法行為に対しても、厳正に対処することとしています。

一六年四月に「船舶油濁損害賠償保障法」が改正され、一七年三月一日以降、外航船舶については船主責任保険加入が義務付けられたため、無保険であつた万景峰九二号は、当初予定していた四月一二日には入港すること

ができず、保険契約締結後の五月一八日に、約五か月ぶりに新潟西港への入港を果たしました。なお、一七年中は、前年に比べて二回少ない計一四回、同港へ入港しています。

また、万景峰九二号への厳しい対応を求める声は依然として強く、入港に反対する団体等は、入港の都度、六〇人から八〇人ほどの規模で、横断幕の掲示、シユープレヒコール等の抗議行動を行っています。

四 対日諸工作的今後の見通し

北朝鮮は、今後とも、ことあるごとに対日非難を継続するとともに、「過去の清算」を最優先させた国交正常化や朝鮮総聯の活動に対する理解者の獲得等を企図して、直接又は朝鮮総聯を介した諸工作を活発に展開するものとみられます。

日朝間の協議においても、北朝鮮側は「拉致は解決済み」、「日本は過去の清算をすべき」との従来の主張に固執するものと見られ、出口を模索する北朝鮮側が、各界関係者に対する様々な働き掛けを続ける可能性は否定できません。



万景峰92号